

聖書の基本： 聖書の重要な教理

パート 1：

神学： 神についての研究

<https://ichthys.com/1Theo.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。(ローマ11章36節-新共同訳)

今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる神が仰せになる、「わたしはアルパであり、オメガである」。(黙示録1章8節)

内容

I. 神の本質.....	1
A.無限性：.....	3
B.完全性：.....	7
II. 神の位格：三位一体.....	12
A. 三位一体の定義 神は本質において一つ、位格において三つ.....	13
B. 聖書における三位一体.....	17
C. 旧約聖書における三位一体.....	30

I. 神の本質

神の本質について語ることは、神が本当は誰であるかについて語ることです。本質とは「存在」を意味します。本質(エッセンス)という言葉はラテン語の「存在する」という動詞に由来し、ギリシャ語のウシア(ousia)の訳語です。また「ある」という意味もあります。存在している、また存在以上に、神はあられるのです。神は、モーセにエホバ(またはヤーウェ)という御名を宣言され、その意味を説明されたとき、このことをすべて

の人に明らかにされたのです:¹

神はモーセに言われた、「わたしは、**有って有る者**」。また言われた、「イスラエルの人々にこう言いなさい、『**わたしは有る**』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と」。神はまたモーセに言われた、「イスラエルの人々にこう言いなさい『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主[「**ある**」:YHVH]が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と。これは永遠にわたしの名、これは世々のわたしの呼び名である。(出エジプト3章14-15節)

神の存在や本質は、本来、崇高で輝かしいものです。この本質的な輝きは、聖書ではしばしば**光**や**栄光**と呼ばれています。光は、近寄りがたく清い神**であられること**の素晴らしさを強調します(ヤコブ 1 章 17 節; cf. ダニエル 2 章 22 節):

神はただひとり不死を保ち、近づきがたい**光**の中に住み、人間の中で**だれも見**た者がなく、**見ることもできない**かたである。(第一テモテ6章16節前半)

神は**光**であって、神には**少しの暗いところもない**。(第一ヨハネ1章5節後半)

栄光とは、神がどのようなお方であるかが人類に目に見える形で輝いていることを強調するものであり(出エジプト 33 章 18-23 節; 列王記上 8 章 11 節; ルカ 2 章 9 節; 使徒行伝 7 章 55 節; ローマ 3 章 23 節; 第二ペテロ 1 章 17 節; 黙示録 21 章 23 節)、御子、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの**栄光**の啓示を通して、最も

¹ エホバ Jehovah とヤーウェ Jahweh という二つの英語表記は、しばしば「テトラグラマトン」と呼ばれる、主の名を四つの子音で英語表記した名前です。ヘブル語では、yhvh (יהוה) は伝統的に「アドナイ」と発声されますが、旧約聖書では母音がありません。これらの節で「私はある／なる」に基づくものとして説明されている「主」という神名は、ヘブル語の動詞「ある」または「なる」(この二つの動詞はヘブル語では非常に近い)のいずれかに由来する可能性があります。同様に、יהוהという形は、「わたしはある／なる」のように時間に関係なく繰り返される動作を表す) 不完了体と(動詞の意味を一度に要約する、つまり「ある／なる」の本質を示す) 絶対不定詞を掛け合わせたような独特の形です。このように、ヘブル語の文脈と動詞の形から、「御名」とは、主が時間や現象に関係なく、有り、存在することの宣言であることは十分に明らかです。Q.E.D.<証明終わり>

顕著に示されました([マタイ 24 章 30 節](#); [ヨハネ 1 章 14 節](#)):

神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。御子は神の**栄光**の輝きであり、神の**本質**の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。[\(ヘブル 1 章 1-3 節 前半\)](#)

神の御言葉である聖書に記されているように、神の存在は、神の**性質** *nature*(すなわち、神の本質の**構成**)と神の**性格** *character*(すなわち、神の本質の**特徴**)という観点から考えるのが最善です。神は**性質**において**無限**であり、**性格**において**完全**です²。

A.無限性:

神はその**性質**において無限であり、あらゆる肯定的な意味において無限であり、拘束されません:

イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。(申命記 6 章 4 節)

しっかりと把握すれば、神の無限性、すなわちあらゆる意味において、また考え得るあらゆる真の基準において無限であることは、**神の能力を照らし出す**明確な概念となります。神の無限の性質は常に、人間の心が理解できる最高、最善、最純粋を超えるものです。唯一であられることで、万物は神から出で、神によって成り([第一コリント 8 章 6 節](#)、[ヘブル 2 章 10 節](#))、神なしには何も存在し得ないのです([ヨハネ 1 章 3 節](#)、[コロサイ 1 章 16-17 節](#)、[ヘブル 1 章 2-3 節](#))。したがって、この唯一性は無限性を意味します—神はすべてを包含する唯一の神だからです。唯一性とは、すべてを理解すると同時に、理解しがたいものです。他のすべては数えることができますが、「唯一」であり、ご自身で造られた有限の世界において比較するものがない唯一無二の無限のお方である神だけは別です。

² 神の特質の無限性と神の性格の完全性は不変であり、「不動」です([マラキ 3 章 6 節](#); [ヘブル 13 章 8 節](#); [ヤコブ 1 章 17 節](#))。

1. 神は**霊**です：³

神は霊であるから、礼拝をする者も、[神の]霊と[神の]まこととをもって礼拝すべきである。(ヨハネ 4 章 24 節)

神の存在は物理的な宇宙を超越しています。物質的な問題や関心事によって制限されたり、束縛されたりすることはありません。神は物質には一切左右されません。神は物質で造られていません。神は物質を創造され、ご自身が望むようにそれを用いられます([創世記 1 章 1 節](#), [14 章 19 節](#), [22 節](#); [申命記 10 章 14 節](#); [ヨブ 38 章 4-11 節](#); [詩篇 102 章 25 節](#); [イザヤ 45 章 18 節](#); [ヨハネ 1 章 3 節](#); [コロサイ 1 章 16-17 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#))。

2. 神は**永遠**です：

山がまだ生れず、あなたがまだ地と世界とを造られなかったとき、としえからとしえまで、あなたは神でいらせられる。(詩篇 90 章 2 節)

神の存在は時間を超越しています。時間的な問題や関心事によって制限されたり、束縛されたりすることはありません。神は時間に左右されることは一切ありません。神は時間に束縛されることはありません。神は時間を創造し、ご自身の望むようにそれを用いられます([詩篇 90 篇 4 節](#); [93 章 2 節](#), [102 章 24-27 節](#); [ミカ 5 章 2 節](#); [ヨハネ 8 章 58 節](#), [17 章 5 節](#); [ヘブル 13 章 8 節](#); [黙示録 4 章 8-11 節](#))。

3. 神は**測り知れない**

しかし神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。ましてわたしの建てたこの宮はなおさらです。(列王記上 8 章 27 節)

神の存在は空間を超越しています。空間的な問題や事情によって制限されたり、

³ 神の霊性は、神が私たちの霊を創造されたことから([創世記 2 章 7 節](#), [民数記 16 章 22 節](#), [伝道の書 11 章 5 節](#), [ヘブル 12 章 9 節](#))、また、天使の霊([詩篇 104 篇 4 節](#); [イザヤ 40 章 26 節](#); [ヘブル 1 章 7 節](#), [14 節](#))を創造されたことから明らかです。

束縛されたりすることはありません。神はいかなる意味においても空間に左右されません。神は空間によって制限されることはありません。神は空間を創造され、ご自分が望むようにそれを用いられます([歴代志下 2 章 5-6 節](#); [ヨブ 11 章 7-9 節](#), [36 章 26 節](#), [37 章 23 節](#), [詩篇 86 章 10 節](#); [エレミヤ 23 章 24 節](#); [ヨハネ 6 章 21 節](#); [使徒 17 章 24 節](#); [エペソ 1 章 23 節](#)後半)。

4. 神は**唯一**です:

聖者は言われる、「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか」。(イザヤ 40 章 25 節)

唯一性は、神の無限の性質に由来します。この宇宙には、神と比肩しうる者は他に誰もいません。神はご自身の被造物の中で絶対的に唯一であり、それゆえ、すべての栄誉を受けるべきお方です。このように、唯一性は神の有する**本質的な権威と能力**、すなわち宇宙を神の望むままに秩序づける能力を物語っています。物理的な宇宙を超越しているという観点から見ると、神はその霊性、永遠性、計り知れないものによって唯一無二の存在です。物理的宇宙内での優位性という観点から見ると、神は全能、全知、全存在によって唯一無二の存在です([申命記 4 章 39 節](#), [6 章 4 節](#), [32 章 39 節](#); [イザヤ 43 章 10-11 節](#), [45 章 5, 6, 14, 21, 22 節](#); [ヤコブ 2 章 19 節](#))。道徳的に責任を負う被造物と、彼らが自由意志を行使できる世界を創造できるのは神だけです。

5. 神は**全能**です:

見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるのか。(エレミヤ 32 章 27 節)

神は物質とは無関係に万能です。物質的な領域において、神が望むことは何でも実現することができ、神の意志を離れて実現することはできません。それゆえ、大小にかかわらず、神ができない行いは存在しないし、過去にも存在しなかったし、これからは存在しないでしょう。全能のお方として([黙示録 1 章 8 節](#), [4 章 8 節](#))、神の被造物の中で現在も未来永劫も、神が望まれるあらゆる出来事を成し遂げる能力は包括的かつ絶対的です([創世記 18 章 14 節](#); [ヨブ記 5 章 9 節](#), [26 章 6-14 節](#), [38 章 4-38 節](#), [42 章 2 節](#); [詩篇 8 篇 1-9 節](#), [62 篇 11 節](#)(ヘブル語: 欽定訳参照); [箴言 21 章 30 節](#); [イザヤ 40 章 26 節](#); [エレミヤ 27 章 5 節](#); [ルカ 1 章 37 節](#); [ヨハネ 1 章 3 節](#); [ローマ](#)

[1 章 20 節](#); [エペソ 1 章 19 節](#); [コロサイ 1 章 17 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#))。

6. 神は全知です:

わたしは神である、わたしのほかに神はない。

わたしは神である、わたしと等しい者はない。

わたしは終りの事を[まさに]初めから告げ、

まだなされない事を[永遠の]昔から告げて言う(イザヤ 46 章 9b-10 節)

神は時間に関係なく全知です。時間的な領域において、神が望むことは何でも実現できます。それゆえ、神は、はじめから終わりまで、すべてのことを知っておられ、これまでも知っておられ、これからも知っておられます。永遠におられる方([詩篇 90 章 2 節, 4 節](#))であられる神は、被造物の中で起こった、あるいは起こるであろうあらゆる出来事についての知識を包括的かつ絶対的に持っておられます([サムエル記上 2 章 3 節](#); [詩篇 139 篇 1-4 節, 12 節](#); [147 篇 5 節](#); [イザヤ 42 章 9 節](#); [マタイ 10 章 29-30 節, 11 章 21 節](#); [ヨハネ 1 章 1-2 節](#); [第一コリント 2 章 7-10 節](#); [ヘブル 4 章 13 節](#); [第一ヨハネ 3 章 20 節](#))。

7. 神は遍在します:

わたしはどこへ行って、

あなたのみたまを離れましょうか。

わたしはどこへ行って、

あなたのみ前をのがれましょうか。

わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。

わたしが陰府に床を設けても、

あなたはそこにおられます。

わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、

あなたのみ手はその所でわたしを導き、

あなたの右のみ手はわたしをささえられます。

(詩篇 139 章 7-10 節)

神は空間に関係なく、常に存在します。空間的な領域において、神が望まれることは何でも実現できます([ヨブ 26 章 7 節](#))。それゆえ、神はこれまでも、そしてこれから

も、どこにでも、ローカルにもあらゆる場所にも存在する能力を持っています。あらゆる場所に存在する唯一の存在([使徒行伝 17 章 27-28 節](#))として、神は望む時にいつでも、被造物のあらゆる場所に存在する能力を持ち、その能力は包括的で絶対的なものです。([ヨブ 22 章 12 節](#); [イザヤ 66 章 1-2 節](#); [エレミヤ 23 章 23-24 節](#); [箴言 15 章 3 節](#))。

B.完全性:

神はその御性質において完全であり、あらゆる点において潔白であり、罪がありません。

それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となちなさい。([マタイ5章48節](#))

神の完全性、つまりあらゆる面で完璧であり、考え得るあらゆる真の基準にかなった完全性をしっかりと理解すれば、私たちは神の動機を明確に理解することができます。神の完全な御性質は、人間の心が理解しうる最高、最善、そして最も純粋なものであり、それ以下になることはありません。

1. 神は善です([出エジプト18章9節](#), [33章19節](#); [歴代志下6章41節](#); [詩篇23篇6節](#), [25篇8節](#), [27篇13節](#), [31篇19節](#), [33篇5節](#), [119篇68節](#), [145篇7a節](#); [マタイ19章17節](#); [マルコ10章18節](#); [ルカ18章19節](#); [ローマ2章4節](#), [11章22節](#); [テトス3章4-5節](#)):

主はすべてのものに恵みがあり、
そのあわれみはすべてのみわざの上にあります。([詩篇145篇9節](#))

神の性質は善(ヘブル語tobh:טוב)であり、それは悪の対極に位置するものです。では、善なる神は罪深い人間に対してどのように応えるのでしょうか？神の善なる性質において、神は常に私たちの最善を願っておられます。ですから、神が私たちから解放され善に専心することを望まれるのは、誠実な願いなのです。私たちは罪深い存在であり、本来は神の祝福を受けるに値しない存在ですが、神の善性により、神はご自身の性格を損なうことなく、すなわち、神の御子イエス・キリストを賜物として与えることにより、罪から私たちを贖う恵み深い方法を見出されました。

2. 神は**聖なる方**です([出エジプト3章5節](#); [レビ記11章44-45節](#), [21章8節](#); [詩篇22篇3節](#), [30篇4節](#), [99篇9節](#); [イザヤ6章3節](#), [43章15節](#), [55章5b-9節](#), [57章15節](#); [使徒行伝3章14節](#); [黙示録4章8節](#)):

むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、「**わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである**」と書いてあるからである。(第一ペテロ1章15-16節)

神の性質は聖なるものです(ヘブル語qadhosh:קדוש)。それは悪とは完全に分離しています。では、聖なる神は罪深い人間に対してどのように対応されるのでしょうか。神の聖なる性質において、神はどのような理由があろうとも、完璧な基準を妥協されることはありません。それゆえ、悪を断罪し善に報いるという神の決意は揺るぎないものです。しかし、私たちが罪深い存在であり、本来であれば神の裁きを受けるべき存在であるにもかかわらず、神の聖なる御性質を損なうことなく、罪深い私たちを正当化する慈悲深い方法を見出されました。すなわち、私たちの代わりに御子イエス・キリストを裁くという方法です。

3. 神は**忠実で真実**です([申命記32章4節](#); [ヨシュア21章45節](#); [サムエル記下7章28節](#); [列王記上8章56節](#); [詩篇33篇4節](#), [36篇5節](#), [89篇1節](#), [89篇33-34節](#), [111篇7-8節](#), [119篇89-90節](#), [160節](#), [143篇1節](#), [146章6節](#); [イザヤ11章5b節](#); [マタイ24章35節](#); [ヨハネ1章14節](#), [7章28節](#), [14章6節](#), [17章3節](#); [ローマ3章3-4節](#); [第一コリント1章9節](#), [10章13節](#); [第二コリント1章18節](#); [第一テサロニケ5章23-24節](#); [第二テサロニケ3章3節](#); [第二テモテ2章13節](#); [ヘブル6章18節](#), [10章23節](#), [11章11節](#), [13章5-6節](#); [第一ペテロ4章19節](#); [黙示録3章7節](#), [14節](#), [15章3節](#), [16章7節](#)):

主よ、あなたはわが神、
わたしはあなたをあがめ、御名をほめたたえる。
あなたはさきに驚くべきみわざを行い、
いにしえから定めた計画を
真実をもって行われたから。(イザヤ書25章1節[KJV])

神の御性質は忠実で真実(ヘブル語: 'omen, 'emeth: אֱמֶת, אֱמוּנָה)であり、悪に積極的に反対されます。では、真実と忠実は罪深い人間にどのように対応するのでしょうか？神は、その忠実さと真実において、私たちに約束し、私たちのためにしてくださることすべてにおいて、完全に信頼でき、信用できる方です。それゆえ、イエス・キリストを通して、死の悪から逃れ、永遠のいのちの善を受け入れる道を私たちに与えてくださる神の真実さと信頼性は、非の打ちどころがありません。ですから、たとえ私たちが罪深く、生まれながらにして神の怒りの対象であったとしても、神はその忠実さと真実さにおいて、御自分と私たちの間に平和をもたらし、私たちの罪によって生じた御自分と私たちの間の敵意を、御自分の御性質を汚すことなく取り除く方法、すなわち、御子イエス・キリストの死によって私たちに御自分と和解させる方法を見出されました。

4. 神は**主権者**です([ヨブ 25 章 2 節](#); [詩篇 93 篇 1-2 節](#); [イザヤ 40 章 21-23 節](#), [45 章 21-24 節](#), [46 章 10b-11 節](#), [64 章 8 節](#); [エレミヤ 10 章 10 節](#), [18 章 5-10 節](#); [ダニエル 4 章 34-36 節](#), [7 章 13-14 節](#); [マタイ 28 章 18 節](#); [ローマ 9 章 20-21 節](#); [第一コリント 15 章 24-28 節](#); [エペソ 1 章 20-21 節](#); [ヒリピ 2 章 9-10 節](#); [第一テモテ 6 章 15 節](#); [黙示録 4 章 11 節](#)):

しかし主はとこしえに、み位に座し、
さばきのために、みくらを設けられました。
主は正義をもって世界をさばき、
公平をもつてもろもろの民をさばかれます。(詩篇 9 章 7-8 節)

神の完全なご性格から主権が生まれます。宇宙を支配する正当な権利を持つのは神だけです。神はご自身の創造物の中で絶対的な主権者であり、それゆえにすべての栄誉を受けるべき唯一の存在です。主権は、神の**道徳的権威**と、神が望むように宇宙を支配する**権利**を意味します。道徳的な宇宙を超越するという観点から、神は、その善良さ、神聖さ、真理(被造物から独立した固有の性質)によって主権者なのです。道徳的な宇宙における**至高**の立場から、神は、その愛、義、命(善良さ、神聖さ、真理に対応する被造物に適用される性質)によって主権者なのです。神のみが、神が創造された道徳的に責任を負うべき被造物の究極の裁き主となり、彼らの行動に責任を負わせる資格があります。⁴ 事実上の宇宙の支配者(神の完全なご性質を通して)および法的な宇宙の支配者(神の完全なご性格を通して)として、神は至高の権威を持つ

⁴ もちろん、人類の歴史が始まって以来、神は無法状態が人類を根絶やしにしないように、この世において、この権威の一部を人間の機関に委任してきました([創世記 3 章 16 節後半](#); [詩篇 82 篇 6-7 節](#); [ヨハネ 10 章 34 節](#); [ローマ 13 章 1-7 節](#); [第一ペテロ 2 章 13 節](#))。

ています。

- 1) 神の**善性**から、罪深い被造物に対して愛を示されること、すなわち、罪を無視するのではなく、罪の代償として御子イエス・キリストを十字架上で死なせることで、自ら罪を**償われ**(贖罪)しました。私たちは、神の主権によるこの行為の結果を恵み(ヘブル語 *chen* חֵן; ギリシャ語 *charis*: χάρις)と呼びます。
- 2) 神の**聖性**から、罪深い被造物に**正義**を執行すること。すなわち、彼らを罪に委ねるのではなく、彼らの代わりに御子イエス・キリストが十字架上で死なれたことを根拠に、神御自身が彼らを赦されます(義認)。私たちは、神の主権によるこの行為の結果を**慈悲**と呼びます(ヘブライ語 *chesed*: חֶסֶד; ギリシャ語 *eleos*: ἔλεος)。
- 3) 神の**真実と誠実さ**から、罪深い被造物に**命を与える**こと。すなわち、人々が罪のまま死ぬことを許さず、代わりに御子イエス・キリストの十字架上の死によって、人々と神との間に和解をもたらすことです(和解)。私たちは、神の主権によるこの行為の結果を**平和**と呼びます(ヘブライ語 *shalom*: שָׁלוֹם、ギリシャ語 *eirēnē*: εἰρήνη)。

5. 神は**愛**です([申命記 10 章 14-15 節](#); [イザヤ 63 章 9 節](#); [エレミヤ 31 章 3 節](#); [ヨハネ 3 章 16 節](#), [15 章 13 節](#); [ローマ 5 章 6-8 節](#), [8 章 38-39 節](#); [エペソ 2 章 5-9 節](#), [3 章 19 節](#); [テトス 3 章 4-7 節](#); [第一ヨハネ 3 章 16 節](#), [4 章 10 節](#), [4 章 16-19 節](#))。

愛さない者は、神を知らない。神は愛である。(第一ヨハネ 4 章 8 節)

被造物に対する愛を持つことは、神の善性の自然な帰結です。神の本質的な善良さから、神は私たちを完全な愛で愛し、罪深い私たちを助けたいと願っておられます。しかし、その過程において神の聖性や正義を無視することなく、また(悪が示唆するように)私たちの罪を何の代償もなく赦すこともありません。ですから、神はご自身の性格を損なうことなく**愛をもって私たちに手を差し伸べる**方法を見つけなければなりません。そして、神は唯一の御子を私たちのために与え、犠牲にされることによって、その方法を見出されました。**恵み**とは、聖書で神がイエス・キリストを通して私たちを罪から愛をもって贖う方針を指す言葉です。私たちは、主イエス・キリストを救い主として受け入れることによって、神の愛と贖いの恵みを受け入れ、受け取ります。

6. 神は**正しい方**です([申命記 32 章 4 節](#); [詩篇 7 篇 9 節](#), [11 篇 7 節](#), [33 篇 5 節](#), [45](#)

[篇 7 節](#), [89 篇 14 節](#), [111 篇 7-8 節](#), [119 篇 142 節](#), [145 篇 7 節後半](#); [イザヤ 30 章 18 節](#), [42 章 1-4 節](#), [61 章 8 節](#); [ヨハネ 7 章 18 節](#); [ローマ 3 章 4 節](#), [21-24 節](#), [8 章 1-4 節](#), [11 章 22 節](#); [第二コリント 5 章 21 節](#); [第一ペテロ 2 章 23-24 節](#); [黙示録 16 章 5 節](#))。

被造物に対して正義を求めることは、神の聖性からすれば当然の結果です。神の本質的な聖性から、神は私たちを罪深い状態のまま正義によって断罪しなければなりません。しかし、その過程において神の善良さや愛を欠くことはなく、私たちを罪(悪)に委ねることもありません。神は、神の御性質を損なうことなく、私たちを**義とみなす方法**を見つけられました。そして、神は、その方法として、私たちのためにひとり子を賜り、そのひとり子を犠牲とされました。憐れみとは、イエス・キリストの死に基づいて私たちを正当に赦すという神のご計画の聖書における名称です。私たちは、主イエス・キリストを救い主として受け入れ、受け取ることで、神の憐れみによる義の提供を受け入れ、受け取ります。

7. 神は**いのち**です([申命記 30 章 20 節後半](#); [第一サムエル 2 章 6 節](#); [ヨブ記 10 章 12 節](#), [33 章 4 節](#); [詩篇 16 章 8-11 節](#), [36 章 9 節](#); [エレミヤ 10 章 10 節](#); [ヨハネ 1 章 4 節](#), [3 章 16 節](#), [5 章 26 節](#), [6 章 57 節](#), [11 章 25 節](#), [17 章 3 節](#); [使徒行伝 3 章 15 節](#); [第一テサロニケ 1 章 9 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-2 節](#), [5 章 20 節後半](#); [黙示録 1 章 18 節](#))

わたしは道であり、真理であり、命である。(ヨハネ 14 章 6 節)

神の被造物の命を救うことは、神の真実さと誠実さから自然に導かれる結果です。神の本質的な真実さと信頼性から、神は、私たちを神のもとに回復し、それによって永遠の命へと導くという、神の恵み深く慈悲深い約束を尊重します。それにより、私たちは罪深い状態にあることで私たちに課せられる死の宣告から解放されます。しかし、神は、神の善良さや愛と、神の聖性や正義という相反する要求を同時に解決することを怠ってはいません(悪が存在するという事実を踏まえて)。神は、神の性格にふさわしい方法を見出し、私たちと神を引き離している罪と、その結果生じる神の怒りの壁を取り除き、私たちのために独り子を贈り物として与え、犠牲として捧げることによってそれを成し遂げました(私たちが命を得るために、神は独り子を死なせました)。聖書では、神の命を与える方針を「平和」と呼び、それはイエス・キリストの働きに基づいて私たちを神と和解させるものです。私たちは、主イエス・キリストを救い主として受け入れ、受け取ることで、神の命、平和、和解の申し出を受け入れます。

まとめ

神のいつくしみは愛にあふれ、罪深い人間に恵みを与えてくださいます：
悪は、愛にあふれた神は咎めることはできないと言いますが、
神は私たちが生きるために御子を咎められました、
キリストの血によって私たちを愛のうちに贖われました。

神の聖さは正義の中に溢れ、罪深い人間に憐れみを与えます：
悪は、正義の神は私たちを赦すことができないと言いますが、
神はご自身の御子を咎めることによって、私たちを赦されたのです、
キリストの血によって私たちを義とされました。

神の誠実さと真理は人生に溢れ、罪深い人間に神との平和をもたらします：
悪は、尊厳な神は私たちとの関係を修復し得ないと言いますが、
神は御子を通して私たちの間に平和をお与えになりました、
キリストの血潮に基づいて、私たちをご自分と和解させ、永遠の命を与えてく
ださったのです。

神の本質の全体的要約

無限の御性質		完全な御性格	
(独立)	(応用)	(独立)	(応用)
霊性	全能	善性	愛
永遠	全知	聖性	正義
測り知れない	普遍	真理	命
唯一無二の神		唯一の主権者である神	

II. 神の位格：三位一体

A. 三位一体の定義：神は本質において一つ、位格において三つ

＜位格：他者に対して区別される主体。人の「人格」に当たる言葉＞

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。
昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」。
(黙示録 4 章 8 節)

聖書には、神の三位一体を表す特定の用語はありません。新約聖書の靈感を受けた執筆者たちは、三位一体と呼ばれる教義、すなわち、三つの異なる位格を持つ唯一の神の存在は比較的単純な概念であり、(聖句をざっと読んだだけでも)上に引用したような箇所から十分に理解できると考えていました⁵。使徒教父たち、すなわち新約聖書を実際に執筆した人々の後に続いた世代も、聖句を引用するだけで、父、子、聖霊の関係を論じるのに十分であると感じていました。(神の唯一の三位一体の性質を否定しようとするさまざまな異端に対して)キリスト教の初期の世代が、聖書を読み解く常識的なアプローチに基づいて当然のこととしていたものを擁護する方法として、「三位一体」という用語自体が一般的に使用されるようになったのは、2 世紀後半から 3 世紀初頭になってからでした。父なる神、主イエス・キリスト、聖霊はすべて神であり、同時に、私たちが「位格」と呼ぶような形で、互いに異なる存在であるということです。神は一つ。神は三つでもあります。そして、これらの記述の間に矛盾はありません。

三位一体の最も単純で、最も良く、最も伝統的な定義は、神は**本質において一つ**であり、**位格において三つ**であるということです。この教義を完全な言葉で言えば、父は神であり、子は神であり、聖霊は神であり、同時に父は子でも聖霊でもなく、子は父でも聖霊でもなく、聖霊は父でも子でもないということです。

三位一体とは**何であるか**をよりよく理解するためには、まず、三位一体が上記の定義(「本質において一つであり、人格において三つである」)に照らして、三位一体とは**何でないか**を考える必要があります：

1. 神は本質において一つですが、それは三位一体の一つの位格だけが神であるという意味ではありません： 神は三位一体であり、三位一体のすべての位格(父、子、聖霊)が神なのです。三位一体のメンバーの神性に異議を唱えた過去の異端には、(キリストは養子という意味においてのみ神の子であると主張する)養子論、(キリストは神の霊によって力を与えられた人間的性質しか持たなかったと教える)エビオン派の

⁵ 旧約聖書で明らかにされている三位一体については、下記セクション II C.を参照してください。

異端、(神の一位格性を主張し、キリストと聖霊の神性を否定する)ユニテリアン主義などがあります。しかし聖書は、三位一体の三者が神であると教えています([イザヤ 63 章 9-14 節](#); [マタイ 3 章 16-17 節](#), [28 章 19 節](#); [ヨハネ 14 章 16-17 節](#); [第一コリント 12 章 4-6 節](#); [第二コリント 13 章 13 節](#); [エペソ 4 章 4-6 節](#); [第一ペテロ 1 章 1-2 節](#); [黙示録 1 章 4-6 節](#)):

a) 父は神です([マタイ 6 章 9 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [エペソ 3 章 14-15 節](#)):

今いまし、昔いまし、やがてきたるべき者、全能者にして主なる神が仰せになる、「わたしはアルパであり、オメガである」。(黙示録 1 章 8 節)

b) 御子は神です([ヨハネ 5 章 18 節](#), [10 章 30 節](#), [10 章 33 節](#); [ローマ 9 章 5 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [コロサイ 2 章 9 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#)):

初めに言があった。言は[創造の前から]神[父]と共にあった。言は神[そのもの]であった。この言は初めに神[父]と共にあった。⁶(ヨハネ 1 章 1-2 節)

c) 聖霊は神です([創世記 1 章 2 節](#); [詩篇 139 篇 7 節](#); [使徒行伝 5 章 3-4 節](#); [第一コリント 12 章 11 節](#); また、主が語っておられる[ヘブル 3 章 7-11 節](#)と[詩篇 95 篇 7-11 節](#)を比較してください):

主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。(第二コリント 3 章 17 節)

⁶ ヨハネによる福音書第 1 章 1-2 節の第 1 節において、「言は神であった」という句は、「言は a (単数)の神であった」と正當に翻訳することはできません。第一に、この節の冒頭で、使徒ヨハネは父なる神を指すのに、ギリシャ語の theos (θεός) という定冠詞を付けた表現(「[sc.父]なる神」)を使用しており、慣例に従っています。そのため、同じ組み合わせを「ことば」を指すのに再び使用すると、混乱を招く可能性があります。「ことば」が「[sc.父]なる神」と本当に同一であるかのように思われる可能性があり、これはヨハネがここで否定しようとしている点のひとつです。第二に、ギリシャ語には不定冠詞(「a/an」)はありませんが、不定代名詞の tis (τις) は「ある特定のもの」を意味します。もしキリストが何らかの形で神であるが、実際には「神」ではないという主張であるならば、ギリシャ語の読者はまさにこの単語を期待するでしょう。ですから、ヨハネがこの単語を表現する方法は三つしかありませんでした。1) 言は「唯一の神」であった(しかし、これは父とキリストの間に実質的な区別がないことを意味します)。2) 言は「特定の神」であった(しかし、これはキリストが父のレベルの神ではなく、より劣った神<多数の神々の中の一つの神 a certain god>であることを意味します)。または 3) 言は「神」であった(これはヨハネが実際に記したものであり、父とは異なる神性を言に完全に、かつ明確に帰属させるものです)。

2. 神は本質において一つですが、それは三位一体がただ一つの位格<パーソン:人間の「人格」に当たる>である(単にご自身の三つの態様や側面を示している)という意味では**ありません**。神は位格において三つであり、三位一体の三者(父と子と聖霊)はすべて、ひとりの多面的な個性の現れではなく、別個の主体者なのです。三位一体の各位格の別個の性格に異議を唱えた過去の異端には、モーダル主義(キリストと聖霊は御父のパーソナリティの単なる「様相」であるという考え方)やドセティズム(キリストは実在しているように見えるだけで、実際は御父の計画を表す一種の幻影にすぎなかったという考え方)があります。しかし聖書は、三位一体の三者すべてが別個の位格(パーソン)であると教えています:

a) 御父は御自身の権利において唯一無二のお方です(御子とは別個のお方だからです):

わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、父)のもとに来ると、その前に導かれた。(ダニエル 7 章 13 節)

b) 御子は、御自身が唯一無二のお方です(御父とは別個のお方だからです):

神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました。(ヘブル 10 章 7 節) [詩篇 40 篇 7-8 節]

c) 聖霊は、御自身が唯一無二のお方です(別個のお方として行動されるからです):

御霊もまた同じように、弱いわしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。(ローマ 8 章 26 節)

3. 神は位格において三つですが、それは三位一体のメンバー(各位格)の間に地位、活動、実体の劣等性や格差があることを意味するものではありません(人間同士の関係では、そうした格差が必然的に生じるでしょうが): 神は本質において一つであり、三位一体のすべてのメンバー(父と子と聖霊)は、同等であり、永遠に共存し、同一本質のパートナーです。三位一体のメンバーの同等性に異議を唱えた過去の異端には、(キリストまたは聖霊は本質的に父よりも劣っている主張する)従属主義や(キリストは、父なる神と完全に等しい神性を持たないと教える)アリウス主義があります。しかし、聖

書は、三位一体のすべてのメンバーが同じ本質の同格の者であると教えています：

a) 三つの位格は皆、神としての地位の完全かつ平等な分け前を持っています(洗礼の信仰告白の式において、それぞれに等しい位階が与えられていることからわかります)：

イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。(マタイ 28 章 18-20 節前半)

b) 三つの位格は皆、(創造に共に関与していることからわかるように) 神の永遠の機能を完全にかつ平等に共有しています：

神はまた言われた、「**われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、**… (創世記 1 章 26 節)

c) 三つの位格は皆、神の実体を完全かつ平等に共有しています(第二コリント人への手紙の使徒の祝祷の中で、神のいつくしみの方針である恵み、神のいつくしみの自然な帰結(または発露)である愛、神のいつくしみの究極的な結果である交わりが、それぞれ御子、御父、聖霊に帰されていることからわかります)：

主イエス・キリストの恵みと、「父」なる神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。(第二コリント 13 章 14 節)

4. 神は位格的には三つですが、それは三位一体が三つ(またはそれ以上)の異なる「神々」で構成されているという意味ではありません： 神は本質において一つであり、三位一体のすべてのメンバー(父と子と聖霊)は、似たような本質を持つ三つの似たような存在ではなく、同じ本質の唯一の共有者なのです。(格の低い、あるいは格の高い数多くの「神々」が存在する異教のパンテオン崇拝に倣った) 聖人や天使を神格化するいわゆるキリスト教の宗派はすべて、本質的に異端の範疇に属します。しかし、聖書は、三位一体の三者のメンバーだけが同じユニークな本質の共有者であると教えています：

a) 御父は唯一無二の神であると啓示されています：

あなたにこの事を示したのは、主こそ神であって、ほかに神のないことを知らせるためであった。(申命記 4 章 35 節)

b) 御子と父とは、唯一無二の神であることが明らかにされています：

わたしと父とは一つである。(ヨハネ 10 章 30 節)⁷

c) 聖霊と御子と父とは、唯一無二の神であることが明らかにされています：

わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。(ヨハネ 14 章 16-17 節)

B. 聖書における三位一体

1. 序論: 聖書における三位一体に関する記述を最も適切に解釈する定義は、上述の通り、すなわち、神は本質において一つであり、位格において三つであるということです。この伝統的な定義と、すぐ上で議論され文書化された四つの補足を組み合わせると、三位一体について聖書が述べていることがさらに明確になります：

- a) 三位一体の三者はすべて神の位格。
- b) 三位一体の三者はすべて唯一無二の存在。
- c) 三位一体の三者はすべて、同格かつ永久の本質を持つ。
- d) 三位一体の三者はすべて、同じ神の本質を共有している。

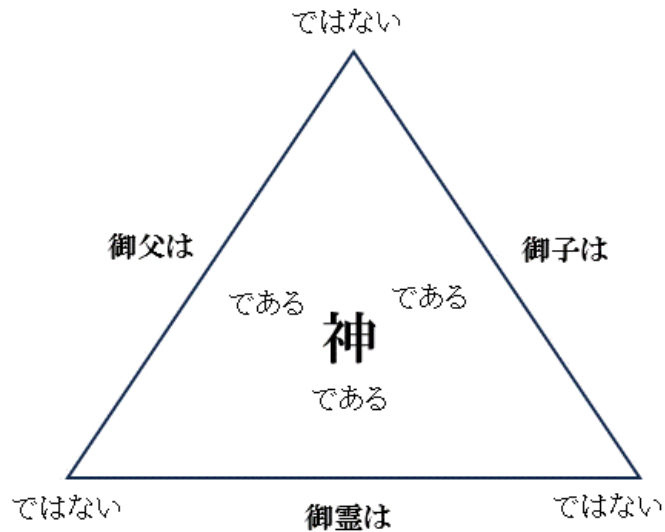
⁷ ここでの「一つ」を意味するギリシャ語 (hen) は中性であり、男性名詞ではありません(つまり、「一人の人間」ではなく、「一つのもの=本質」を意味します)。彼の敵対的な聴衆でさえ、これが神性への主張であることを理解していたことは、33 節から明らかです：「私たちは、あなたが善行をしたから石打ちにするものではありません。あなたはただの人間であるにもかかわらず、自分を神としているからです」。

三位一体に関する正統派の主張に異議を唱える数多くの異端(上述)が生じていることからわかるように、この教義を聖書に則った適切な方法で表現することは難しいものです。これは、三位一体の定義が聖書に書かれた実際の記述から離れるほど、特に当てはまります(前述の通り、使徒や使徒教父たちにとっては、それらの記述で十分であったと考えられています)。ここで注目すべきは、「本質」と「位格」という用語でさえも、初代教会の神学者たちの中には議論の余地があると感じていた人たちがいたということです。私たちは人間の本質(私たちは皆、同じ霊から切り出された者である)や人間の人格(私たちは皆、唯一無二の個人である)について語るかもしれませんが、神の本質は人間の本質とは異なり(一つには、三位一体の三者は同じ神の本質を共有している)、三位一体における位格は人間の人格のそれとは異なります(例えば、三位一体の神の完全な一致と目的は、永遠に変わることがなく、量的にも質的にも人間の経験を超越しています)。

ここでの教訓は、聖書を解説する際には常に危険な合理主義的思索は、新約聖書の登場によって初めて完全に啓示された教義である三位一体の場合には、なおさら避けなければならないということです。この教義について神が選ばれたのは、注意深く段階的に明らかにすることでした。旧約聖書における三位一体については後述しますが(C.)、ここで付け加えておきたいのは、この教義が慎重に、段階的に明らかにされてきた理由の大部分は(それを理解する上での私たち人間の限界を超えて)、三位一体の性質に関する誤った考えが歴史的に私たちのキリスト教信仰の基礎全体に深刻な脅威を与えてきたというあまりにも明白な事実(上記の議論を参照)にあるのかもしれません。パンの中にわずかなパン種<教えの中の小さな間違い>が入ってさえいれば、サタンは三位一体を「神々」の集まり(つまり異教と何ら変わらないもの)にしたり、あるいは「神」が3つの帽子をかぶっている(つまりキリストの受肉と犠牲の重要性と効力を完全に排除する)ように仕向けたりすることができます。

神は、誤った解釈を招くような情報や、有益であるよりも害を及ぼす可能性のある不正確な説明を与えることなく、愛に満ちた英知によって、私たちが最も知る必要のあることを知らせてくださっています。

2. 三位一体の説明： 先ほど述べたように、三位一体のような注意深く守られた教義を説明しようとすることは、良いより悪い可能性があります。以下に述べるようなタイプの図解の根本的な問題は、すべての図解に潜在的に危険で真実でない比較点が含まれていることであり、その点を強調しすぎると、異端的な結論に至る危険性があります。このような図解に対する第一の反論は、神は神であり、他の何者でもないのだから、どんな図解も不完全で不正確なものにならざるを得ないということです(この事実



は、なぜ聖書にこのような図解が登場しないのかをよく説明していると思われます：[イザヤ 40 章 18 節](#)）。そして、まだあります。歴史的に、三位一体の教理に対するサタンの攻撃は、私たちのキリスト教信仰の神髄にとって極めて重要な教えであり、神の三重の主権的性格や三つの位格における神の神性に焦点を当ててきました。しかし、この神の三位一体のパーソナリティという現実は、三位一体に関するすべての図解が（三位一体に「似た」ものは存在しないため、必然的に）見落としている点なのです。

- a) 初期教会からの図解: 三位一体の「三角形」: なぜなら、三位一体の三つの構成員はすべて神であり（「本質において一つ」）、しかも互いに異なる（「位格において三つ」）存在だからです:

ではない

- b) 人間の家族の図解: 三位一体と同じように、人間にも複数の構成員がおり、全員が似たような霊的本質を持っています。しかし、三位一体は単一無二で神聖な本質を共有しており、その三位一体の一致した目的は、人間の領域にはないものです。

- c) 人間の心の例: 三位一**神**のように、心は同時に一つのものでありながら、同時に複数のもの（知性、感情、良心など）であると言うことができ、それ自身と対話することができ、それ自身と対立することさえあります。しかし、三位一体は別個の神聖な人格で構成されており、私たちの精神の内面的な働きは、それとは比較になりません。
ではない

- d) 自然界からの例示: 自然界には、区別できる複数の部分から構成され、同時に一つの完全な全体を構成しているものがたくさんあります。例えば、区別できる枝、根、幹はすべて同じ一本の木の一部であり、卵には三つの部分（黄身、白身、殻）がありま

す。この種のイラストはどれも、三位一体のユニークなパーソナリティや、三位一体が共有する神聖な本質を説明するのに役立つものではありません。

e) 物理的な領域からの図解: このカテゴリーには、三位一体を説明するために用いられてきた、より興味深い例がいくつか含まれています:

1. 光は一つでありながら区別される:(第一ヨハネ 1 章 5 節)

周波は聞こえる

目に見える光

赤外線は感じる

2. 宇宙は一つでありながら区別される:

時間

宇宙

物質

3. 時間は 1 つでありながら区別される:

過去

現在

未来

4. 空間は一つでありながら区別される:

長さ

幅

高さ

5. 物質は 1 つでありながら区別される:

エネルギー

物質

現象

これらの図解の中で最も優れていると言えるのは、これらの複雑で素晴らしいものを創造した神の素晴らしい知恵と力を思い起こさせ(しばしば当たり前のことと思われがちですが)、造り主はさらに複雑で素晴らしい方である可能性が高いことを理解させ、三位一体(「本質は一つ、人格は三つ」)について私たちが真実であると知っていることを、たとえそれが複雑で素晴らしすぎて完全には理解できないように思えても、受け

入れる助けになるということです。しかし、これまで述べてきたように、このような例示が行き過ぎないように注意しなければなりません。「書かれていることを超えて」理解しようとするあまり、このような曖昧な類推に基づいて、かえって危険で聖書では言っていない理論へと導かれてしまわないように。三位一体はしばしば、私たちのキリスト教信仰にとって良い「リトマス試験紙」です。三位一体を受け入れるには、神の存在だけでなく、イエス・キリストの独自性と神性を受け入れなければなりません。これが信者を不信者から分かつものとなります([第一ヨハネ 2 章 22-23 節](#))。三位一体の理解を歪めることによって、悪魔は最終的にイエス・キリストに対する私たちの信仰を破壊しようとするのです。

3. 神の計画における三位一体の役割: 三位一体の本質を理解するために聖書以外の図解を用いるよりも価値あるアプローチは、聖書に記述されている三位一体の機能を検証することです。聖書には、神が人間の歴史の中でどのように働かれるのか、また、今回のテーマでは、三位一体の各位格がその働きの中でどのような役割を果たすのか、つまり「神の計画」として知られていることについて、多くのことが書かれています。

a) はじめに: 神は人間の歴史の中で、その場しのぎや反応的に働かれるのではなく、創造の瞬間から「すべてのことを共に働かせて益とされる」([ローマ 8 章 28 節](#))のです。神のご計画については、本シリーズの第 2 部 B([終末論](#))において、それ自体のテーマとして論じられますが、この時点で、三位一体の各位格がそのご計画を実行する際に果たした独自の役割について考察することは有益であり、そうすることによって、三位一体の真の性質について聖書的洞察を得ることができます。

b) 三位一体の名前: 三位一体について多くを理解するためには、三位一体がどのような名前を持っているかを考察する必要があります。三位一体は総称して自分たちを神と呼びます。旧約聖書では、ヘブル語で神を意味する「**エロヒーム**」(新約聖書では、ギリシヤ語で神を意味する一般的な単語「**セオス**」に翻訳されています)は、厳密には、もともと「力ある者」を意味する単語の複数形です。したがって、三位一体は複数形にすることで、さらなる威厳を表しています。しかし、旧約聖書における三位一体の各位格は、個々では、ヘブル語のヤーウェ(新約聖書では、ギリシヤ語で主を意味する一般的な単語である**キリオス**)と訳されています。これは、主の時を超えたダイナミックな存在に特別な注意を促す言葉であることが分かっています(上記[セクション I](#)、[脚注 1](#)を参照)。神と主というこの二つの名前は、それぞれ、三位一体の一体性(「**エロヒーム**」は複数形で、三位一体を総称して指します)と、三位一体の個々の位格の共同神性(「**ヤーウェ**」は単数形ですが、三位一体のどの位格も個別に指すことができます)を

強調しています。

イエス・キリストの出現と降臨に続く新約聖書における三位一体の完全な啓示によって(旧約聖書における三位一体については後述の第 II 部 C を参照)、父、子、聖霊という名前は、三位一体の役割(したがって、三位一体そのもの)をさらに明確に理解させてくれます。

1) 父(三位一体の第一位格):

－ **起源:** 新約聖書でよく知られている神の父性という言葉や考え方は、モーセ五書以降の旧約聖書にも見られます。父という言葉は[申命記 32 章 6 節](#)で初めて神に使われています:「主はあなたを生み、あなたを造り、あなたを堅く立てられたあなたの父ではないか」。その後、同じ章の 18 節で、神は「あなたがたを生んだ岩」と呼ばれています。神の父性についての概念は[出エジプト記 4 章 22 節](#)にも記されており、イスラエルは神の「長子」と呼ばれています。

－ **意義:** 「父」という名称の使用は、明らかに、比喻として受け取られることを意図したものです。私たちを産んだ父親のように、主は私たちの創造者です。父親のように、主は私たちの権威者であり、訓練者であり、しつけする者であり、教師です([ヘブル 12 章 5-11 節](#))。そして、忘れてはならないのは、神は私たちを気遣い、深く愛し、私たちを守り、安全を確保し、私たちにとって本当に最善のものを望んでおられる方であるということです(私たちが最善と考えるものに関わらず)。人間である私たちの地上の父親には長所も短所もあり、最善を尽くそうとするものの、私たちにとって何が最善であるかについての不完全な情報を基に行動せざるを得ませんでした。しかし、天のお父様は父親としての理想を完璧に体現されています。常に完全な愛をもって私たちに接し、私たちにしてくださることはすべて、疑いなく私たちの究極的な幸福のためです。私たちを叱るにしても、祝福するにしても、それは私たちの存在や心の中にあるものすべてを完全に理解した上でのことなのです。

－ **位格**(人の「人格」に相当):父なる神は、三位一体の第一位格(すなわち、権威ある「わたし」としてしばしば言及されます。なぜなら、神は「わたしは」として私たちに語りかけ、私たちの神、創造主、宇宙の支配者として、権威ある意志を直接的に示されるからです(例:[出エジプト 3 章 14-15 節](#); [イザヤ 46 章 9-10 節](#))。

2) 御子(三位一体の第二位格):

- **起源:** 聖なる天使たち([ヨブ記 38 章 7 節](#))もそうであるように、私たち信者は皆、神の「子」です([ローマ 8 章 14 節](#); [ガラテヤ 3 章 26 節](#), [4 章 5 節](#); 参照:[ヨハネ 1 章 12 節](#); [第一ヨハネ 3 章 1-2 節](#))。この広範にわたる子としての概念は、父なる神がその従順な被造物すべてに対して持つ父親としての立場に基づいていますが、「神の御子(私たちの主、イエス・キリスト)」はただおひとりです。キリストの受肉は、ベールに包まれた形で、儀式と犠牲によって預言され、予示されていましたが、旧約聖書の時代には、キリストが実際に初降臨されるまで、大きな謎のままでした。今では、神の御子の原型が私たちの主イエス・キリストであること、そして旧約聖書の類似はこの方の出現を待ち望む予型であったことが明らかにされています:例えば、アダムは神の子([ルカ 3 章 38 節](#))-キリストは卓越した「最後のアダム」そのものです([第一コリント 15 章 45 節](#); また、[ダニエル 7 章 13-14 節](#)や新約聖書でも用いられている「人の子[すなわち、'adam]」)であり、イスラエルは神の僕([イザヤ 42 章 18 節](#)-)です。-キリストは世の罪を取り除く唯一の苦難の僕([イザヤ 42 章 1 節](#); [52 章 13 節](#) - [53 章 12 節](#))であり、イスラエルは神の子-キリストはその子です([ホセア 11 章 1 節](#)は[マタイ 2 章 15 節](#)で成就)。最後に、ソロモンはダビデの直系の子孫ですが、キリストはその究極の子孫であり、救世主であり、神の子でもあるダビデの子メシヤです([詩篇 2 篇 7-12 節](#); [110 篇 1 節](#))。

- **意義:** 上述した父性の概念に基づき、息子であることは、父との特別で壊れることのない関係、父の意志に従順に従う関係、また特別な特権、継承、権威の共有の関係を表します。息子(特に王の息子)は、しばしば父よりも親しみ易い存在です。王と罪を犯した従者たちとの仲介者の役割は、父である王と被造物である従者たち、両者と同等である者だけが果たすことができます:そのような和解の使命に遣わされることができるのは(受肉した)御子だけです([マタイ 21 章 33-40 節](#)参照)。

- **位格:** 御子は、私たちの父なる神に代わって私たちと**関係を築く**ために肉体で現れ(例えば、[ヨハネ 15 章 14-15 節](#))、私たちに代わって父なる神に近づくことができるようになられた([ヨハネ 14 章 6 節](#); [エペソ 2 章 18 節](#), [3 章 12 節](#))ため、私たちは御子を二人称(すなわち、親しみやすい「あなた」)で呼ぶことが多いのです。

3) 聖霊(三位一体の第三位格):

- **起源:** 旧約聖書の第一章([創世記 1 章 2 節](#))から新約聖書の最終章([黙示録 22 章 17 節](#))まで、「霊」という言葉は聖霊なる神を指して使われています。ヘブル語とギリシヤ語で「霊」を意味するルアハ ruach と Pneuma pneuma という言葉は、それぞれ「風」または「そよ風」という意味が核となっています。そして、この名称の例えからも、重要な

点が汲み取れます。

－ **意義：** 風は強力で見えない力です。私たちはそれを知覚し、その影響を経験しますが、それがどこから来るのか、またどこへ向かっているのかはわかりません([ヨハネ 3 章 8 節](#))。風は、穏やかで暖かくするものから、強力で怖いものまであります。「風」は、神のご計画における聖霊の役割を的確に表現しています：神のご計画を推進する上で、その目に見えない力強い善への働きかけ([ゼカリヤ 4 章 6 節](#); [第一コリント 12 章 3 節](#))と悪の抑制([創世記 6 章 3 節](#); [第一コリント 12 章 3 節](#); [第二テサロニケ 2 章 5-8 節](#))を過小評価してはいけません。

－ **位格：** 聖霊はしばしば三位一体の第三人称(すなわち、目に見えない「彼」＜著者は英語で「he」を使っています＞という方)と呼ばれます。なぜなら、御父と違って、聖霊は私たちに直接語りかけることはなく、御子と違って、聖霊は私たちに現されることはないからです：むしろ、風のように、私たちの**目には見えない存在**ですが、だからといって、私たちがとても個人的で生き生きした形で、主の力を経験しないわけではありません。([ヨハネ 14 章 16-17 節](#); [ガラテヤ 5 章 22-26 節](#))

注意： 上記の説明で明らかなように、父、子、聖霊という名前は、人類に対する神のご計画における三位一体のそれぞれの役割を代表するものであり、そのご計画における三つの神の位格の関係と働きを理解する助けとなるように与えられたものです。これらの名前自体は、上記で概説したように、明らかに人間の参考基準として意図されたたとえの枠を超えて拡大解釈されてはなりません。これは軽視できる問題ではありません。なぜなら、過去の異端がキリストの完全かつ等しい神性を否定しようとしてきたのは、主に「御子」という称号を根拠としていたからです(例えば、超アリウス主義のように、父なる神に本質的に従属する存在としてキリストを位置づけるなど)。聖霊の例は、これらの称号のみに基づいて行われる分析がいかに見当違いであるかを示しています。なぜなら、聖霊は、私たちのキリスト教的な生活における目に見えないけれども強力な役割を適切に表現する言葉として「風」が用いられるとしても、決して「無生物」でも「非人格的」でもないからです。御霊は、私たちに対して、また三位一体の他の位格に対して、非常に個人的な方法で働き([ヨハネ 3 章 5 節](#), [14 章 16-17 節](#), [14 章 26 節](#), [15 章 26 節](#), [16 章 8-15 節](#); [使徒行伝 5 章 3 節](#), [5 章 9 節](#), [13 章 2 節](#), [16 章 6-10 節](#); [ローマ 8 章 26 節](#); [第一コリント 2 章 10 節](#); [黙示録 2 章 7 節](#))、私たちの慰め主、励まし主([ヨハネ 14 章 16 節](#), [16 章 7 節](#))として働かれます。私たちが聖霊から受けるリーダーシップ([ローマ 8 章 4 節](#); [ガラテヤ 5 章 16 節](#)と [18 節](#))、励まし([ヨハネ 14 章 16 節](#), [16 章 7 節](#); [第二コリント 1 章 3-7 節](#)参照)、力づけ([ルカ 24 章 49 節](#); [ローマ 15 章 13 節](#))の関係は、私たちが地上で経験することのできる最も「個人的」で「生き生きとした」関

係です。

c) 具体的な新約聖書から見る三位一体の役割

1) マタイ 3 章 16-17 節:

イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の**御霊**がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から**声**があって言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。(マタイ 3 章 16-17 節)

解説 : キリストのバプテスマは、ヨハネが行った他のどのバプテスマとも大きく異なる象徴性を持っていました。ヨハネは通常の洗礼の意味を、目に見える悔い改めの行為と罪の洗い清めの象徴であると(正しく)理解していました。ヨハネが罪のないメシヤにバプテスマを施すのを躊躇したのは、このためです([マタイ 3 章 14 節](#))。しかし、キリストの場合においてはその象徴性は異なります: キリストが水の中に入るのは、私たちの罪の中にご自身の身を沈める(つまり、それらの罪のために死ぬ)意思を表し; 水から上がるのは復活を表します。このことにおいて、キリストが死と復活の十字架で死に打ち勝った三位一体の役割が象徴されています。私たちを罪から救う使命を引き受けた御子が(その人間性において)生き返り、聖霊が御子を生き返らせ([第一ペテロ 3 章 18 節](#))、そして、御子を遣わされた御父は、御子の働きと犠牲が満足のいくものであり、効能があり、喜ばれるものであると宣言されます。

2) ヨハネ 14 章 16 節

わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。(ヨハネ 14 章 16 節)

解説: この聖句は、御父が権威ある立場にあり、御子が信者のためにとりなし、聖霊が私たちを助けるために遣わされることを示しています。

3) 第一コリント 12 章 4-6 節:

霊の賜物は種々あるが、**御霊**は同じである。務は種々あるが、**主**は同じである。働きは種々あるが、すべてのもののの中に働いてすべてのことを

なさる神は、同じである。(第一コリント 12 章 4-6 節)

解説：ここに、私たちクリスチャンとしての働きを支える三位一体のそれぞれの役割がはっきりと示されています。聖霊は私たちに特定の霊的賜物を与え([第一コリント 12 章 11 節](#)参照)、特定の働きは私たちの主イエス・キリストによって割り当てられると言われ、御父はそれらの働きの実を監督し、力を与えられています：神は私たちに賜物(聖霊：聖霊は私たちを力づける)を与え、神は私たちに務め(主イエス・キリスト：私たちは主の使命を分かち合う)を与え、神は私たちに実(御父：すべての影響は御父の計画の一部である)を与えます。

4) 第二コリント 13 章 14 節：

主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。(第二コリント 13 章 13 節)

解説：三位一体とは、救いの前、中、後という観点から見たものです：御父の愛は、罪深い人類のために御子を死に遣わし(参照：[ヨハネ 3 章 16 節](#))、御子の犠牲は、御父の義の条件を満たすことによって、私たちと御父とを和解させ、その結果、御子が支払ってくださったので、私たちに恵み、すなわち救いを無償で与えてくださいます。御霊は、神の愛に由来するこの恵みの申し出(キリストの死に基づく)を受け入れるすべての人を、神との交わりのうちに結びつけます。

5) エペソ 3 章 14-17 節：

こういうわけで、わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあって「父」と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、**御霊**により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、**キリスト**があなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、(エペソ 3 章 14-17 節)

解説：パウロのこの使徒の祈りの中で、パウロが祈る対象の権威者として御父を見ることが出来ます。パウロは私たちが聖霊によって強められるように祈っています。パウロの祈りの目的は、私たちが救い主イエス・キリストのように成長し、あらゆる面でイエス・キリストとの関係を向上させることです。

6) エペソ 4 章 4-6 節:

からだは一つ、**御霊**も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる**神**は一つである。(エペソ 4 章 4-6 節)

解説: この「信仰の一致」([エペソ 4 章 3 節](#))について、パウロは私たちのクリスチャン信仰の最も重要な共通要素について私たちに思い出させています。そうするにあたり、三位一体の各位格の役割の特定の側面が強調されています: それは、私たちをキリストのからだの中に入れてくださる聖霊の役割と、それに伴うキリストにあって復活する希望、私たちの信仰の対象としての主イエス・キリストの役割と、その信仰を通して主イエス・キリストと一つになるための聖霊のバプテスマ、そして、あらゆる方法で信者の家族を一つに結び合わせてくれる愛のひとつの神としての父なる神の役割です。

7) 第一ペテロ 1 章 1-2 節:

イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤおよびビテニヤに離散し寄留している人たち、すなわち、**イエス・キリスト**に従い、かつ、その血のそそぎを受けるために、**父なる神**の予知されたところによって選ばれ、**御霊**のきよめにあずかっている人たちへ。恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。(第一ペテロ 1 章 1-2 節)

解説: ペテロは、私たち信者が、御父の救いの計画、私たちが信じるときに聖霊が私たちのために救いを実行してくださること、そして、私たちが信仰を置く御子の救いのわざに従って、永遠のいのちに選ばれていることを教えています。

8) 黙示録 1 章 4-6 節:

ヨハネからアジヤにある七つの教会へ。**今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかた**から、また、その御座の前にある七つの**霊**から、また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者である**イエス・キリスト**から、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権

力とがあるように、アメン。

解説：ヨハネの三位一体からの挨拶では、御父の永遠性と悪魔の世界を間近に奪取すること、御霊の悪魔の世界の監督([黙示録 5 章 6 節](#); [イザヤ 11 章 2 節](#)参照)、そして悪魔の世界に対する御子の勝利と征服が強調されています。

d) 三位一体の役割の説明：私たちが神と対面するとき、「私たちが知られているように、私たちも知るようになる」([第一コリント 13 章 12 節](#))でしょう。その時まで、三位一体の神についての私たちの理解は、聖書が人類の歴史に対する神の計画を実行する過程で三位一体をどのように明らかにしているかに本質的に依存しています。以下では、その計画の実施のいくつかの側面において、三位一体が担うさまざまな役割について考察します：

1) 神の計画：御父の御心によって認可され([エペソ 1 章 11 節](#); [黙示録 4 章 11 節](#))、御子である御言葉によって実行され([ヘブル 1 章 2-3 節](#); [ヨハネ 1 章 1-3 節](#))、御霊の知恵と力によって管理されます([イザヤ 11 章 2 節](#); [ゼカリヤ 4 章 6 節](#))。

2) 世界の創造：御父によって指示され([創世記 1 章 1 節](#), [1 章 3 節](#); [黙示録 4 章 11 節](#))、御子によって実行され([第一コリント 8 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 16 節](#); [ヘブル 1 章 2 節](#))、御霊によって力を与えられました([詩篇 33 篇 6 節](#)後半; [箴言 8 章 27-31 節](#))。

3) み言葉の啓示：御父はみ言葉を表し([イザヤ 55 章 11 節](#), [イザヤ 40 章 8 節](#), [45 章 23 節](#))、キリストはみ言葉です([ヨハネ 1 章 1-3 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#))。聖霊はみ言葉を啓示します([第一コリント 2 章 10-16 節](#))。

4) キリストの初降臨：キリストは父から遣わされ([ヘブル 10 章 7 節](#))、受胎され([マタイ 1 章 20 節](#))、導かれ([マタイ 4 章 1 節](#))、聖霊によって力を与えられ([ヨハネ 3 章 34 節](#))、私たちの救いのために自己犠牲の任務を果たします。

5) 救いの勝利([マタイ 12 章 20 節](#); [ヨハネ 16 章 33 節](#); [第一コリント 15 章 54-57 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 5 章 5 節](#))：御父は御子を使命に遣わし([ヨハネ 3 章 16 節](#))、御子は使命を成し遂げ([ヨハネ 19 章 30 節](#); [ヘブル 10 章 7 節](#))、聖霊は使命を支えます([マタイ 3 章 16 節](#); [ヨハネ 3 章 34 節](#))。

6) 信者の和解：私たちは御父と疎遠になっていますが([エペソ 4 章 18 節](#); [コロサイ 1 章 21 節](#); [第一ヨハネ 1 章 3 節](#)と [6 節](#))、御子の十字架上の犠牲による仲介によって御

父との交わりを回復され([エペソ 2 章 12-13 節](#); [コロサイ 1 章 22 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#))、御霊が私たちの新しい交わりの代理人として働かれます([第二コリント 13 章 14 節](#); [ピリピ 2 章 1 節](#))。

7) 信者の再生:永遠のいのちへの鍵は御父が握っておられ([ヨハネ 5 章 19-26 節](#); [ローマ 5 章 10-11 節](#))、御子は御子を信じるすべての人のために、御子の死によって永遠のいのちへのアクセスを買い取られ([使徒行伝 3 章 15 節](#), [20 章 28 節](#); [第一ペテロ 1 章 18 節](#))、御霊は信者を生き返らせ、再生させます([ヨハネ 3 章 5-8 節](#))。

8) 信者の歩み: 御父は聖さの基準を定め([第二コリント 7 章 1 節](#); [第一テサロニケ 4 章 3 節](#); [ヘブル 12 章 14 節](#); [第一ペテロ 1 章 16 節](#))、御子は模範であり([マタイ 16 章 24 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#))、御霊は神が私たちに望まれるように生きる力を与えてくださいます([ローマ 8 章 4 節](#); [ガラテヤ 5 章 16 節](#))。

9) 信仰者の徳: 私たちが聖霊によって力づけられた希望をもって復活を待ち望むことができるように([ローマ 15 章 13 節](#))、私たちの信仰の対象である御子を遣わすことによって、御父は私たちに愛の模範を与えてくださいます([ヨハネ 3 章 16 節](#); [第一ヨハネ 4 章 7-12 節](#))。

10) 信者の霊的賜物:御霊によって与えられ、御子によって具体的な働きが割り当てられ、御父によって具体的な効果が定められています([第一コリント 12 章 4-6 節](#))。

11) 信者の祈り:御父にささげられ([マタイ 6 章 6 節](#))、御子の名によって([ヨハネ 15 章 16 節](#); [16 章 23 節](#))、御霊の力によって成し遂げられます([エペソ 6 章 18 節](#))。

注意:上記の例は、聖書が明らかにする三位一体の教義を説明し、解説するのに役立つように示されていますが、これらによって示唆される「役割分担」は、すべての場合において厳密に解釈されるべきものではありません。これらの(そして他の)三位一体の共同作用のほとんどにおいて、重複があり、聖書ではしばしばほのめかされているにすぎない責任の細分化があります。最後の例を挙げれば、聖書における祈りはほとんど常に御父に向けられたものですが、イエスは([ヨハネ 14 章 14 節](#)で)、私たちが主の名<イエス>によって何かを求めるなら、主はそれを行ってくださいと述べています。教会の歴史の中で、東と西に分かれた大きな論争は、「御霊が遣わされること」と、御父だけが御霊を遣わされたのか([ヨハネ 14 章 26 節](#))、御父と御子が御霊を遣わされたのか([ヨハネ 15 章 26 節](#))という問題に関係していました。ある意味では、どちらも正しいのです(この問題は、本来の権威を持つ御父の役割と、委譲された権威を受ける御

子の役割に帰結します。) ですから、三位一体を理解する際に注意すべきことは、そのような聖句が実際に教えていることを学ぶことに限定し、聖句から導き出した推論だけで決定的な教義原則を構築しないことです。三位一体の三つの位格は、その一致と目的において紛れもなく「一つ」だからです。

C. 旧約聖書における三位一体

1. はじめに: 三位一体は、旧約聖書の聖句の中に存在するだけでなく、(新約聖書の啓示の恩恵を受けて) はっきりと理解できる形で描かれています。神が「われわれのかたちに人を造ろう」([創世記 1 章 26 節](#))と仰せになった時、神の天使たちが三度「聖なる、聖なる、聖なる」と神を賛美した時 ([イザヤ 6 章 3 節](#))、アロンの息子たちが「私の名を」イスラエル人に三重の祝福で「授けよ」と命じられた時 ([民数記 6 章 24-26 節](#))、その明確な意図は、神の三位一体の性質を(伝達しないまでも) 反映することです。さらに、旧約聖書のある箇所では、三位一体がさらに鮮明に表現されています。例えば、ダビデ王の最後の言葉では、神を「主の霊」、「イスラエルの神」、「イスラエルの岩」と、続けて表現しています ([サムエル下 23 章 2-3 節](#); キリストのかたちを「イスラエルの岩」として表現している [第一コリント 10 章 4 節](#) を参照)。旧約聖書における三位一体の存在、つまりベールのすぐ下にある現実を証明するためによく引用される箇所は他にもたくさんありますが(例えば、[イザヤ書 48 章 15-17 節](#), [63 章 9-10 節](#))、おそらく最も良い例は、主がご自身の神性が確かに聖書によって預言されていたことを証明するために用いられた箇所でしょう ([ゼカリヤ 2 章 7-13 節](#) 参照):

パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち

『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。[詩篇 110 篇 1 節]

このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなつた。(マタイ 22 章 41-46 節)

私たちは、ダビデが神の啓示を受けてこの預言を記した際、彼が望んだように来たるべきキリストを明確に視たとは仮定すべきではありません。実際、キリストご自身から「多くの預言者や義人が、イエスの世代に直接示されたもの、すなわちメシヤの顕現を見たいと願った」と伝えられています([マタイ 13 章 17 節](#); [ルカ 10 章 24 節](#); 参照:[ヨハネ 8 章 56 節](#); [第一ペテロ 1 章 10-12 節](#))。イエス・キリストが最初の降臨において世界に示された啓示は、上記の[詩篇 110 篇 1 節](#)(キリストは人間性においてはダビデの子であるが、神性においてはダビデの主である)のような箇所を説明することに加え、旧約聖書の多くの他の箇所を、現在私たちがより完全に理解している三位一体の教理を通じてのみ十分に理解できる基盤を、意図的に提供しています。

旧約聖書では、三位一体は三つの大きな山のように私たちの前に立ちはだかります。イエス・キリストの受肉と新約聖書によってもたらされた啓示によって初めて、私たちは旧約聖書に描かれていた三位一体の姿を遠近法から見るできるようになり、この新たな視点から見たとき、三位一体の山がそれぞれに見えるようになるのです⁸。

しかし、疑問は残ります。なぜ神は、旧約聖書の時代、ご自身の本質の三位一体の性質を覆い隠し、代わりに上記の方法でそれを予見させることをお選びになったのでしょうか？

偶像崇拜は、古代の重大な問題であり、イスラエルの最も深刻な躓きの一つでした。この偶像崇拜は、現在の私たちの三位一体に関する知識がキリスト教以前時代に覆い隠されてきた理由としてよく挙げられます。確かに、偶像崇拜が旧約聖書の信者の信仰と実践に対する脅威であったことは事実です。十戒の最初の二つの戒めがこのテーマを扱っていること([出エジプト記 20 章 1-6 節](#))、またバラムの偶像崇拜を勧める助言が、いかなる呪いよりもイスラエルに破壊的な影響を与えたこと(民数記 25 章)を考えれば、それは明らかです。この議論は、したがって、この現実的な多神教の脅威に対抗するために、神の「唯一性」を強調する必要があったことを示唆しています。これにより、三位一体の正しい理解が歪められる可能性を排除しようとしていたというものです。この説明には多くの価値がありますが、しかし、問題を完全に解決するものではありません⁹。

⁸ 旧約聖書における三位一体のこの表現は、一般に「預言の短縮遠近法」と呼ばれています。この現象の詳細については、[「来たる艱難期」第 1 部.IV.1.a 「預言の短縮遠近法」](#)を参照。

⁹ 異教の神々(ましてや異教の宗教)は、神と神への真の礼拝とはあらゆる点で異なります。このことは、三位一体の啓示にもかかわらず、真の信者には明白であったはずです。二つの明らかな相違点を挙げれば、異教の神々は、三位一体のように「一つ」の目的を持つことは決してありません([ヨハネ 10 章 30 節](#); 参照:[第一コリント 3 章 8 節](#))。また、その個々のメンバーは、全体が存在する

その完全な答えは、イエス・キリストのみ姿にあります。事実が明らかになる前、すなわち、キリストが肉体をまとしてこの世に来られ、その謙遜さ、苦しみ、そして私たちのために払われた犠牲を、私たちの目で実際に見る前に、私たちは三位一体と、キリストの受肉と十字架上の死によって神が私たちのために成されたことを、本当に完全に理解することができるでしょうか？イエス様の受肉という成就した現実がなければ、その栄光を私たちはどのようにしてかすかにでも想像できるでしょうか？そして、イエス様の受肉という成就した事実がなければ、私たちはどのようにして神の三位一体の性質を理解し、感謝することができるでしょうか？キリストがこの世にお生まれになった後、キリストによってのみ、私たちは神をはっきりと見るようになるのです([ヨハネ 1 章 18 節](#), [14 章 9 節](#))。象徴的に私たちを神の臨在から隔てていた神殿のベールが、私たちに代わってキリストが犠牲になることによって二つに裂かれたように([マタイ 27 章 51 節](#))、旧約聖書においてキリストのみ姿を部分的に覆い隠していたベールは、キリストが実際に肉体をまとしてこの世に来られ、私たちのために死なれたことによって取り除かれました。そのため、今、私たちはイエス・キリストを信じる信仰によって、これまで以上に明確に、父なる神、御子、そして聖霊を認識することができるようになりました：

「暗闇から光を放て！」と言われた神は、**イエス・キリストというお方**における神の栄光について私たちの知識を照らすために、私たちの心に[ご自身の光]を放たれた方なのです。(イクシス訳：第二コリント 4 章 6 節)

今日に至るまで、旧約聖書が読まれても、[彼らの不信仰な心には]同じ覆いがかかったままです。そして、それは**キリストにおいてのみ**取り除かれるため、[彼らがこれらの聖句を聞いても、]それは取り除かれることはありません。(イクシス訳：第二コリント 3 章 14 節)

* 御子が世に来られて後、私たちは御子をよりはっきりと見ることができます([ヨハネ 1 章 14 節](#))。

* 御子がこの世に来られた後でなければ、御父をよりはっきりと現すことはできません([ヨハネ 1 章 18 節](#))。

* 御霊は、御子が栄光をお受けになった後でなければ、信者に宿るために遣わされることはできません([ヨハネ 7 章 39 節](#))。

ために不可欠な存在でもありません。

ですから:

* 三位一体は、キリストの最初の降臨後に初めて明確に説明され、理解されるようになりました。この任務は新約聖書によって果たされました。

* 一方、旧約聖書では、最初の降臨以前、三位一体の各位格は、当然のことながら、新約聖書ほど明確に区別されていませんでした。

2. 旧約聖書に予表されたメシヤ: 旧約聖書の常識に反して、イエス・キリストとその犠牲は旧約聖書の至る所に描かれています。さらに、私たちは新約聖書の聖句から、メシヤの使命と苦難の必要性が旧約聖書の信者たちに十分にはっきりと理解されていたことを知っています(キリストがエマオへの道で説明したように: [ルカ 24 章 27 節](#), [第一ペテロ 1 章 10-12 節](#), [ヘブル 11 章 26 節](#)も参照)。事実、旧約聖書には、私たちに代わって神の御子が受肉し、死に、苦しみを受けることを予表するために用いられた多種多様な「予型」があります。予型論については、本シリーズの第 4 部 A(キリスト論)で詳しく述べますが、ここで旧約聖書におけるキリストの苦難の描写の二つの主要なカテゴリーについて触れておきましょう:

a) 血の犠牲: アダムとエバのために神が用意された皮の衣([創世記 3 章 21 節](#))から、身代わりの死の描写のためのカインの犠牲よりも優れているアベルの犠牲([創世記 4 章 4 節](#))、私たちの身代わりとなる他者の死を表す血を尊重することを要求するノアの契約([創世記 9 章 4 節](#))、モーセの律法で命じられた一連の複雑ないけにえの儀式全体に至るまで、そのすべてが他者<英語では大文字の Other、すなわち御子を予表>の血による贖いを描写しており([ヘブル 9 章 22 節](#)-参照)、神は、旧約聖書のすべての信者に、罪の赦しは軽い問題ではなく、神だけが彼らのためにできることであり、神に信頼する人々のために神が何らかの形でご自身で支払わなければならない過酷で血なまぐさい代価を伴うものであることを明確にするために、血の犠牲という「教材」を広く用いられたのです。

b) 預言: 私たちに代わってキリストが受けた身代わりの苦しみと死は、旧約聖書を通して預言されています:

- [創世記 3 章 15 節](#): 彼<主>はおまえのかしらを砕き、おまえ[蛇]は彼のかかとを砕くであろう。

- [民数記 21 章 9 節](#): モーセは青銅で一つのへびを造り、それをさおの上に掛けて置いた。すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた。
- [詩篇 22 篇 1 節](#): わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。
- [イザヤ 53 章 3 節](#): 彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。

3. 旧約聖書におけるキリストの顕現: 三位一体の表現という点で、旧約聖書と新約聖書の主な違いは、新約聖書ではキリストがはっきりと目に見え、父と区別されているのに対して、旧約聖書では、父と子の区別がしばしば困難であることです¹⁰。上記の議論にもかかわらず、キリストの受肉に関する正確な詳細が旧約聖書で隠されていたという事実から、旧約聖書に登場する目に見える人物は主に父なる神である、という誤解が、多くのキリスト教界でも広く見られます。新約聖書では、受肉したイエス・キリストが世に見えるようになりますが(キリストの真の栄光だけが遮蔽されています)、旧約聖書では、キリストも父なる神を表しますが、受肉した形ではありません。さらに、新約聖書では、主が「わたしと父とは一つである」([ヨハネ 10 章 30 節](#))と言われたとき、あるいは父の言葉を言われたとき([ヨハネ 8 章 28 節](#), [14 章 24 節](#))、父と子との区別は(この一致とともに)完全に明確で明白です。しかし、旧約聖書では、神が現れる時、現れるのは一貫して御子ですが、それは御父の代表として、御父の言葉を語るのもであって、当時、両者の区別は完全には理解されていませんでしたし、把握されていませんでした([ヨハネ 8 章 26 節](#)と[28 節](#)):

それゆえに、わたしが語っていることは、わたしの父がわたしに仰せになったことを、そのまま語っているのである」。(ヨハネ 12 章 50 節)

a) テオファニーとクリストファニーの定義 : 「テオファニー」と「クリストファニー」という言葉は、それぞれ「神の顕現<見える姿で現れる>」と「キリストの顕現」を意味します。それぞれの言葉の後半部分は、ギリシャ語の語源「ファン(phan)」、「現れる」から派生

¹⁰ 聖霊は新約聖書において、特に遣わされた後、より明確に区別されていますが、聖霊の場合の問題は、本質的な違いよりも、程度の問題(つまり、新約聖書においてより明確である)です。旧約聖書においても、聖霊は明確に現れています(例:[創世記 1 章 2 節](#), [6 章 3 節](#); [イザヤ 63 章 10 節](#); [ゼカリヤ 4 章 6 節](#))。ただし、新約聖書、特に聖霊が信者の慰め主として遣わされた後([ヨハネ 14 章 16 節](#))ほど、明確ではなく頻度も多くありません。聖霊は旧約聖書では新約聖書よりも「裏方」的な働きをすることが多いかもしれませんが、それは聖霊が三位一体の他の二つの位格と区別しにくいからではありません。聖霊については、このシリーズの第 5 部「pneumatology」で別途検討します。

しています(この語源から「フェノメノン(phenomenon 現象)」という言葉も生まれています)。このセクションでは、少なくとも聖書の用語では、ここで本当に考慮すべき出来事のカテゴリーはキリストの出現だけであると論じます。なぜなら、旧約聖書における神の顕現はすべてキリストの顕現であるからです。

まず最初に明確にしておかなければならないのは、私たちが「キリストの顕現(クリストファニー)」と言う場合、それは決して、私たちの主イエス・キリストが真の人間として文字通り、物理的に現れたことを指しているのではないということです。キリストは、受肉によって真の人間性をお取りになって以来、一時的なキリストの顕現の形で再び現れたことはありません。旧約聖書における神のすべての出現は、実際にはキリストの出現であるという立場は、この地上における明らかに肉体的な出現以外の、父なる神の他の種類の現れ、例えば夢や幻(ダニエルの「日の老いたる者」の幻が最たる例：[ダニエル 7 章 13-14 節](#))の可能性も認めています¹¹。

b) 御父は人の目には見えないという性質： 天国に行くまで、私たちは御父を見ることができません。天使たちは「御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである」([マタイ 18 章 10 節](#))。しかし、御父は私たちの天の御父であり([マタイ 6 章 9 節](#), [26 節](#)、他)、御父の篡奪者となるべきサタンと、御父の摂政と定められたキリストとの地上の争いがまだ激化している限り、御父は御自身の威厳のために天にとどまり、御自分のしもべを通して御心を語り、働かれます。最終的かつ究極的な勝利まで、そして宇宙が完全に浄化された後にのみ、御父は新しい地上に来られて、私たちと共に永遠に住まわれるのです([黙示録 21 章 1-3 節](#))¹²。その時まで、御父は、御自分の代表者である御子イエス・キリストを通して行動し、語られるものの、人間の目には見えないままです。

また言われた、「しかし、あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである」。(出エジプト 33 章 20 節)

¹¹ ダニエルはこの幻の中で、御父と御子を見ました。御父に対して用いられた「日の老いたる者」という独特な称号に注目してください。この称号は、ヘブル語の構文では「日々の起源よりもさらに古い」という意味に解釈することができ、したがって、創世記 1 章 2 節-。この立場は、ダニエル書 7 章で「人の子」に獣から地を取り戻す任務を委任された御父の役割と完全に一致しています。御父に関する最も重要な二つの記録された幻、ダニエル書 7 章と黙示録 4-5 章は、どちらも、御子が世界の新しい支配者としてその地位に就くよう委任される場面を描いています。

¹² これらの問題についてさらに詳しく知りたい方は、このシリーズの「終末論」である「Part 2B」が掲載されるまで、シリーズ「悪魔の反逆：艱難期の背景」および「来たる大艱難期：黙示録の歴史」をご覧ください。

イスラエルの神、救主よ、まことに、あなたはご自分を隠しておられる神である。(イザヤ 45 章 15 節)

神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 18 節)

神から出た者のほかに、だれかが父を見たのではない。その者だけが父を見たのである。(ヨハネ 6 章 46 節)

神(御父)はただひとり不死を保ち、近づきがたい光の中に住み、人間の中でだれも見つかる者がなく、見ることもできないかたである。(第一テモテ 6 章 16 節)

神を見た者は、まだひとりもいない。(第一ヨハネ 4 章 12 節)

c) キリストから離れては父なる神に近づくことはできない：もし人類が滅びることなく父なる神の栄光を見ることができたとしたら、少なくとも、その時点から人間の自由意志の問題は深刻に損なわれることになります。神の偉大さと威厳に直面すれば、神の存在を否定することは不可能になるだけでなく、ほとんどの人は自分の意志に反してでも、(真に自由な選択からではなく)恐怖のあまり、神と神の意志に従わざるを得なくなると思われます¹³。人間の自由意志を守るといふ原則とともに、父なる神へのアクセスという問題は、なぜ父が現世で私たちに見えないままなのかを説明するのにも役立ちます。

この研究で先に述べたように、父は御自身の創造物の中に遍在しておられますが、御自身の被造物に対して目に見える存在として、聖書では常に天にいますと表現されています(例えば、[マタイ 6 章 9 節](#), [26 節](#))。明らかに、私たちが肉体をもって生きている限り、「神を求める」ために天に行くことはできません([申命記 30 章 12-13 節](#); [ローマ 10 章 6 節](#))。御父は、御座が天にあるという事実([黙示録 4 章 2 節](#); [ヘブル 4 章 16 節](#))によって、私たちには近づけないのです。御父と私たちを隔てるこの「物理的な」距離は、神と人間との間の霊的な距離を示しています。三位一体の位格である神の権威と聖さを象徴するお方として、義なる御父はご自分を人間の罪から完全に切り離し

¹³ 出エジプト記第 14 章で、神がパロの心を硬くされたことも同様です。神の力強い奇跡と不思議に直面した人々は、神から特別な許可がなければ、神の威厳に満ちた意志に抵抗することは不可能でした。ましてや、実際に神をその目で見たら、なおさらでしょう。シリーズ「出エジプト記 14 章：パロの心を硬くする」をご覧ください。

ておられます。事実、罪深い人間が神と対面することは、私たちがその本性からして死に値する存在であることを直ちに悟らせることになります([創世記 32 章 30 節](#))：

その時わたしは言った、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。(イザヤ 6 章 5 節)

私たちは天に行き、御父に弁明することはできませんが、キリスト・イエスは私たちのために天から下ってくださった方です([ヨハネ 3 章 13 節](#))。彼を信じる信仰と私たちのために主が死んで下さったことによって、私たちは今、主の名によって御父に近づくことができるのです。キリストの血(つまり、私たちに代わって十字架上で死なれたこと)によって、キリストは御父と御子を信じる人々との間の敵意の壁を打ち破られました。イエス・キリストは私たちの間に平和をもたらし、その結果、私たちは今、天の御座と御父の御前に入ることを許されたのです。つまり、キリストの犠牲が受け入れられ、私たちがキリストを受け入れることによって、私たちの祈りと願いは御父に聞き届けられ、御父の良いとされる時に私たち自身も天の聖なる所に入ることができるのです：

このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神[御父]に対して平和を得ている。わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって**導き入れられ**…。(ローマ 5 章 1-2 節前半)

というのは、彼(イエス・キリスト)によって、わたしたち(ユダヤ人と異邦人)両方の者が一つの御霊の中であって、父のみもとに**近づく**ことができるからである。(エペソ 2 章 18 節)

この主キリストにあって、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信をもって大胆に神[御父に]に**近づく**ことができるのである。(エペソ 3 章 12 節)

だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に**近づこう**ではないか。(ヘブル 4 章 16 節)

キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉

においては殺されたが、霊においては生かされたのである。(第一ペテロ 3 章 18 節)

御子への信仰によって、私たちは今、御父への完全な**アクセス**(息子としての地位、交わり、祈りが受け入れられること、御父との永遠のいのち)を持っているという事実は、御子が私たちのために来られて死なれる前は、そのようなアクセスは少なくとも**制限されていた**ことを示しています。私たちのために主が犠牲を捧げられた後に、御父が神殿の幕を裂かれたのは、主の死によって、それまで私たちを御父から隔てていた障壁(すなわち、私たちの罪)が取り除かれたことを劇的に示しています([ルカ 23 章 45 節](#))。今、私たちは祈りによって御父に近づくことができますが、地上の肉体にとどまっている限り、まだ天の御前に入ることはできません。十字架以前は、罪深い人間にとって御父はさらに近づきたい存在でした。従って、旧約聖書に出てくる神の顕現の例が、実際に御父が現れたものだとしたら、それは驚くべきことです。新約聖書において御父が御子を通して御自身を知らせられたように([ヘブル 1 章 1-2 節](#))、旧約聖書においても御父の出現はこの御子によって、つまりキリストの顕現によって媒介された可能性の方がはるかに高いのです。

d) 御父の尊厳: サタンに率いられた天使の反逆が人間の創造に先立つという事実([ヨブ 38 章 7 節](#); [イザヤ 14 章 12-15 節](#); [エゼキエル 28 章 12-19 節](#))は、最終的にサタンに代わってこの世の支配者となるお方、御子イエス・キリストを通して働くという御父の行動様式について多くのことを説明しています([ルカ 10 章 18 節](#); [ヨハネ 12 章 31 節](#), [16 章 11 節](#); [第一コリント 15 章 24-25 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 11 章 15 節](#))¹⁴。三位一体の権威と威厳の姿として、御父はサタンとの闘いを代理者を通して行うことを選ばれますが、その代理者こそ、御自分の犠牲によって罪深い人類を贖い、私たちの敵対者であるルシファーに取って代わられる明星です([イザヤ 14 章 12 節](#)と[黙示録 22 章 16 節](#)を比較してください)。つまり、旧約聖書全体を通して、御子こそが御父を表し、現れるたびに御父の言葉を語っていること(キリストの顕現)は、驚くべきことではないということです。なぜなら、御子は、油注がれた者、メシア、御父によってこの世に遣わされた者だからです。([マタイ 10 章 40 節](#), [21 章 37 節](#); [ルカ 9 章 48 節](#), [10 章 16 節](#); [ヨハネ 12 章 44 節](#), [13 章 20 節](#))。救いの計画における御父の代理人として、御子が御父を代表するというこの原則は、キリストに関する次の事柄からもわかります ...

¹⁴ サタンの反乱の詳細、その起源、経過、そして結末については、シリーズ「サタンの反乱: 艱難期の背景」で取り上げています。

1) メッセージ:キリストは御言葉です(ヨハネ 1 章 1-3 節)。これは、キリストが御父のメッセージと真理の体現者であり、御父の言葉を常に真実かつ正確に語られることを意味します(申命記 18 章 18 節; ヨハネ 8 章 55 節, 14 章 10 節, 14 章 24 節)。キリストは御父の究極のメッセージであり(ヘブル 1 章 1 節<2 節>)、血による新しい契約の御父のメッセンジャーです(イザヤ 42 章 6 節; エレミヤ 31 章 31 節; マラキ 3 章 1 節; マタイ 26 章 28 節; 第一コリント 11 章 25 節)¹⁵。

2) 仲介: キリストは父なる神と罪深い人類との間の仲介者であり(ガラテヤ 3 章 19-20 節; 第一テモテ 2 章 5 節)、その血によって私たちを父と和解させる方です(ローマ 5 章 10-11 節; 第二コリント 5 章 18-21 節; エペソ 2 章 14-16 節; コロサイ 1 章 20-22 節)。

3) 使命: キリストは、私たちの罪のためのいけにえとしてご自身をささげるために、御父によって油注がれ、遣わされたお方です(ヘブル 9 章 11-14 節)。ですから、私たちに代わって御父に贖いをささげる究極の大祭司なのです(ヘブル 5 章 5-10 節)。

4) 君主制: 十字架での勝利を認めて、御父は「彼を主とし、キリストとされた」(使徒行伝 2 章 36 節)のです。この箇所は、キリストが世の支配者としてサタンに取って代わられただけでなく、御父の代理者として世の執政権を受け入れられたことを告げています(御父の再臨が迫っていることを示す旧約聖書の多くの箇所が、新約聖書では御子に適用されていることを説明しています)：

a) 御子の昇天(詩篇 110 篇 1 節とマタイ 22 章 44 節)；

b) 御子は地上において王座に着かれる(詩篇 45 篇 6-7 節とヘブル 1 章 8-9 節)；

c) 創造から永遠までの御子の優位性(詩篇 97 篇 7 節後半とヘブル 1 章 6 節)。

上記のキリストが神の救いの計画において父を「現わす」役割のすべての例は、旧

¹⁵ これは、父が決してご自身で語らないという意味ではありません。父がそうされる時は、天から語られます。父が御子の務めを認める三つの重要な例があります：a) キリストの洗礼の際、その始まりにおいて(マタイ 3 章 17 節; マルコ 1 章 11 節; ルカ 3 章 22 節)；b) 変貌の山で预示された結末において(マタイ 17 章 5 節; マルコ 9 章 7 節; ルカ 9 章 35 節)；c) キリストの十字架刑前の祈りに対する応答において(ヨハネ 12 章 28 節)。

約聖書のすべての神の顕現が、受肉前の父を現し、代表し、父のために語られる御子であること、すなわちクリストファニー(キリストの顕現)であるという立場を支持するものです。

e) 御子の可視性、近づきやすさ、謙遜: 初め私たちは御父を見ることはできませんが、私たちは御子を見ることができ、御子を通して御父を見ることができます([ヨハネ 14 章 9 節](#))。私たちは初め御父に近づくことができませんでした。御子を通して御父に近づくことができるようになりました([ヨハネ 14 章 6 節](#))。また、私たちの罪深さが御父の完全な聖性から私たちを遠ざけていましたが、御子の御業が私たちを聖なる者とし、御父と和解させてくださったのです([コロサイ 1 章 22 節](#))。三位一体の目に見える身近な存在であるキリストは、私たちのためにへりくだり、私たちと結ばれて死んでくださいました([ピリピ 2 章 5-11 節](#))。キリストは、旧約聖書のクリストファニーの時であれ、受肉後に真の人間として現れた後であれ、常に私たちと神格との接点でした。

f) 旧約聖書におけるクリストファニーの事例 :

1) はじめに: 私たちは、旧約聖書の信徒に対する神の出現(テオファニー)が、本当は御父の代理人である私たちの主イエス・キリストが、御父のために行動し、御父に代わって語られる受肉前の出現であることを実証してきました。旧約聖書では、このような出現の大部分(すべてではありませんが)を「主の天使」としています。しかし、神がエデンの園でアダムとエバを問い詰められた時([創世記 3 章 8 節](#))のように、神が現れる時、「天使」の記述はありません。しかし、「天使」が「主」や「主の天使」と様々に表現されている後述の多くの箇所から、このような出現が本質的に類似した現象であることは明らかです: 神が認識可能な形で人間に現れるということです。

「天使」という言葉は、私たちが何世紀にもわたって聖書以外の誤った情報に苦しめられてきたために、混乱を招く可能性があります。「天使」は「メッセンジャー」を意味するギリシャ語アゲロス aggelos の借用語であり、同じ意味を持つヘブル語マラク malach の訳語です。どちらの言葉も本来は天の生き物を意味するものではなく、元々は人間の使者に適用されたものであることに注意することが重要です。神からの使者は必然的に超自然的でなければならず、多くの場合、伝統的な英語の意味での「天使」、つまり神に仕え、奉仕する天の生き物です([ガブリエルなど: ダニエル 8 章 16 節; 9 章 21 節; ルカ 1 章 21-26 節\)。](#)

しかし、**主の天使**はまったく別の話です。聖書はこの言葉を、メッセージを個人的に伝えるためにメッセンジャーの姿をとる、神ご自身の「出現」を意味する言葉として用い

ています。上で見てきたように、**主の天使**(メッセンジャー・サーバント)の出現は、御父のメッセンジャーであり大臣である私たちの主イエス・キリストの出現であると考えるのが最善です。たとえば、イザヤの主の幻([イザヤ書 6 章](#))を読むとき、イザヤの幻は御父の幻であると考えerことは理解できますが、[ヨハネ 12 章 41 節](#)は、イザヤがキリストの栄光を見たことを教えています。そして、私たちは(新約聖書の視点によって)、これは、王の王、主の主という立場の主の幻であり、御父から支配のマントを受け入れた地上の栄光を受けた支配者である主の幻であったと理解するのです(主は「すべての敵を御足の下に置かれる」([第一コリント 15 章 25 節](#))まで支配するために戻って来られます)。モーセにモーセの律法を授ける際に主が現れたのは、イザヤの幻と似たケースです。一見すると、モーセは実際に御父(あるいは御父の似姿、すなわち神の顕現)を見ているのだと思われるかもしれませんが、しかし、新約聖書は、律法は「天使を通して」(ギリシャ語: *de·angelon* *di' angelon*: [ガラテヤ 3 章 19-20 節](#); [ヘブル 2 章 2 節](#); [使徒行伝 7 章 38 節](#)と [53 節](#))与えられたと明言しています。このような「天使の出現」は旧約聖書では神の出現として表現されているので(例えば、[出エジプト 34 章 5 節](#))、律法の授与を「天使」に帰する新約聖書の箇所は、実は、私たちの受肉前の主イエス・キリストの現れである主の天使の出現を通して、御父がモーセに律法を語られたことを示しているのです(すなわち、クリストファニー)。

2) **出エジプトの天使**: 出エジプトの天使のケースは、主の天使の神性と、主イエス・キリストの受肉前の顕現の両方を示しています。

a. 天使は燃える柴の中でモーセに最初に現れました([出エジプト 3 章 2 節](#))。燃える炎の中でモーセに現れたのは主の御使いですが(2 節)、その直後、御使いは御自身を父なる神として表し、「わたしはあなたがたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」(6 節)、「わたしは、有って有る者」(14 節)と言われ、さらに「主」(7 節)と名乗ります。火と柴の象徴は重要です。柴はメシヤであるキリストを枝として注目させ([イザヤ 4 章 2 節](#), [11 章 1 節](#), [53 章 2 節](#); [エレミヤ 23 章 5 節](#), [33 章 15 節](#); [ゼカリヤ 3 章 8 節](#), [6 章 12 節](#))、火はキリストを焼き尽くさない十字架の激しい裁きを表します(例えば、キリストの十字架上の働きを表す[レビ記 1 章](#)の燔祭を参照)。モーセに対する主の天使の最初の出現は、受肉前のキリストが御父を代表し、御父の代弁者として現れたものです。

b. [出エジプト記 14 章 19 節](#)では、天使は雲と火の柱の中に現れ、「神の」と呼ばれています。前の[出エジプト記 13 章 21 節](#)では、エホバご自身が雲と火の柱でイスラエルの民の先を行かれたと言われていました。もう一度言いますが、主と天使は同一の存在であると認識され、火柱の火の中から現れました(この火柱は後に幕屋の箱

の上に立ち、キリストのいけにえを表す血が贖いの日に振りかけられる場所となります：[民数記 9 章 15 節](#)と[レビ記 16 章](#)）、私たちに代わって裁きを耐え忍ぶキリストの救いの御業を描いているのです。

c. [出エジプト記 23 章 20-23 節](#)で、シナイでモーセに律法を授ける一部として、主の天使([ガラテヤ 3 章 19-20 節](#)；[ヘブル 2 章 2 節](#)；[使徒行伝 7 章 38 節](#)と [53 節](#)のような新約聖書の箇所から、上に見たようにそのように特定される)は、イスラエルの民を導き、守るために(キリストが父から遣わされるように)、天使をイスラエルの民の前に「遣わす」と宣言します。モーセはまた、「わたしの名が彼のうちにあるから」(21 節)、天使に従うようにと言われていますが、これは[黙示録 19 章 11-16 節](#)にある人の子の帰還と同じような描写です。

d. この地上にいる間、誰も御父を見たことがないにもかかわらず(上記参照)、長老たちはイスラエルの神を見たと言われています(モーセとアロンと一緒に：[出エジプト 24 章 9-11 節](#))。また、[民数記 12 章 8 節](#)には、モーセが「主の姿」を見たことが記されていますし、申命記には、モーセが他のどの主のしもべとも違って、主と「顔と顔を合わせて」話したことが記されています([申命記 34 章 10 節](#))。それは、御父の実際の臨在ではなく、御父によって遣わされ、御父のために語り、御父の救いの計画をこの世で実現することを引き受けた方、すなわち、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが、受肉前のクリストファニーの中で現れる姿なのです。

e. 最後に、出エジプトに関する天使の最後の出現は[士師記 2 章 1-5 節](#)です。ここで天使は、「あなたがたをエジプトの地から導き上った」方であると主張し、「あなたがたとのわたしの契約」を決して破らないことをイスラエルの民に思い出させます。このような主張をすることができるのは、父なる神ご自身、あるいは父なる神を代表する者、つまり、その契約を成就し、その血潮によって私たち皆のために新しい契約を結んでくださる主のしもべ、私たちの主イエス・キリストだけです。

3) 他の場所での主の天使： 旧約聖書で神が出現される他の箇所も、「主の天使」という用語が実際に使われているかどうかにかかわらず、同様にクリストファニーとして受け取るのが最善です：

a. ヤコブと格闘した超自然的な「人」([創世記 32 章 22-32 節](#))は、ヤコブから次のような応答を引き出しました。[ホセア 12 章 3-4 節](#)は、これが天使であり神であったことを確認しています。

b. [創世記 18 章](#)で、アブラハムに二人の仲間と共に現れた「人」は、後に「主」([22 節](#))とされています。

c. ヨシュアに現れた「人」は([ヨシュア 5 章 13-15 節](#))、「主の軍勢の将」とであると主張します。そして、ヨシュアは主を礼拝するだけでなく(単なる天使が関与する場合には禁じられていること:[黙示録 19 章 10 節](#); [22 章 9 節](#))、聖なる(すなわち、神の臨在によって聖別された:[出エジプト 3 章 5 節](#)—参照)地に立っているのです、くつを脱ぐように言われます。

d. モーセとアロンと共に、イスラエルの長老たちはシナイ山で「イスラエルの神」を見ます([出エジプト 24 章 9-11 節](#))。誰も御父を見たことがなく、御父を見て生きることもできないにもかかわらず、彼らはイスラエルの神を見ただけでなく、御父との交わりの象徴的な食事をしました。この出来事は、来るべき「イスラエルの王」である私たちの主イエス・キリストの血に基づく交わりを明らかに予表するものです([ヨハネ 1 章 49 節](#))。

e. ギデオンに現れた主の天使([士師記 6 章 11-23 節](#))も主であると言われています([16-17 節](#))。この天使はまた、炎の中に燃え尽きる生贄(いけにえ)と自分を同一視しています(杖で生贄に触れることによって)。これは(キリストが私たちのために通る)神の火の裁きを表すものです。

f. サムソンの両親に対する主の天使の出現は、ギデオンに対する天使の出現([士師記 13 章 2-23 節](#))と似ています。しかし、マノアとその妻は、天使が自分たちの前に現れたことを悟りながらも、それが主の天使であることを、その天使が激しく燃えさかるように去って行くまで(21 節)悟らず、その時、マノアは「私たちは神を見た」([22 節](#))と叫びます。この天使の自己犠牲の象徴は、この箇所ですらにはっきりと描かれています。というのも、彼は焼かれたいけにえの「炎の中に昇った」([20 節](#))ののですが、これはまさにキリストが私たちに代わって裁かれる姿であり、旧約聖書の信者に、神が将来備えてくださるいけにえによる罪の赦しを待ち望むように教えているのです。

g. イスラエルの王についてのイザヤの幻([イザヤ 6 章 1 節--](#))は、ダビデの血筋を受け継ぐイスラエルの支配者として任命されたイエス・キリストの幻であることが判明しました。[\(ヨハネ 12 章 41 節\)](#)。

h. 同様に、エゼキエルの神の幻([エゼキエル 1 章 25-28 節](#))は、黙示録([黙示録 1 章 12-16 節](#); 参照:シナイ山のイスラエルの長老たち:[出エジプト 24 章 9-11 節](#))に見られる栄光のキリストの描写と驚くほど似ています。

i. ゼカリヤの主の天使の幻([ゼカリヤ 1 章 7-17 節](#))は、上記の例からわかるように、明らかに神である天使が、万軍の主、すなわち父なる神とは別個のものとして描かれているので、これは間違いなくクリストファニーです。

j. 最後に、キリストが誕生した後、天使は聖書に多く登場するようになりましたが、**主の**天使は聖書に登場しなくなりました。

g) 結論: 主イエス・キリストはこれまでも、そしてこれからも、私たちが父なる神様と永遠の関係を持つために、共に行動し、信じなければならないお方です。「御父を知らせ」([ヨハネ 1 章 18 節](#))たのはキリストだけであり、キリストを通してのみ、私たちは「キリストの御顔にある神の栄光を知る」([第二コリント 4 章 6 節](#))ことができるのです。旧約聖書では、御父が(受肉前の)御子を通して現れるのを聞き、新約聖書では、(受肉した)御子が御父の言葉を語るのを見聞します。

ですから、三位一体は常に、神を信じ従う人々に対する神の啓示の中に存在しているのです。クリスチャンとして、私たちが「神」という言葉を口にするときにはいつでも、私たちにとってこれは三位一体、つまり父と子と聖霊を意味することを心に留めておくべきです。